

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	五高教授 小島伊佐美
Author(s)	上村, 直己
Citation	九州の日独文化交流人物誌: 58-61
Issue date	2005-02-20
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/13475
Right	

五高教授 小島伊佐美



小島伊佐美

旧制高校においてドイツ語は教養のシンボルのような科目であり、重視された。それだけに生徒は熱心にこれを学んだ。現在のように語学は英語だけで良いと考える教師もまっていなかった。その意味で旧制高校の独語教師ほど幸福な存在はなかったと言えるかもしれない。特にナンバースクールには実力があり個性的で、且つ生徒に慕われた教師が多かった。一高の岩元禎、丸山通一、大津康、六高の足立謙吉、八高の沢井要一、桜井天壇といった人々は有名であるが、五高の小島伊佐美も知る人は少ないがそうした一人であり、同校ドイツ語科のシンボリック的存在であった。彼はまた五高名誉教授の第1号でもあった。

小島伊佐美は1875年（明治8）3月16日を以って旧金沢藩士小島與次郎の長男として金沢において生まれた。履歴書（五高記念館蔵）によると、金沢の小学校を終えると共立尋常中学校に入り、1892年（明治25）に同校卒業、翌年第四高等中学校本科に入学している。この間1年間母校の中学校の予備科教師を嘱託されている。明治28年7月第四高等学校を卒業すると、上京し帝国大学文科大学の独逸文学科入学した。ここで3年間カール・フロレンツ教師の薫陶を受けた。そして同31年7月に卒業すると、直ちに熊本五高の独語講師となり赴任した。半年後に教授に任命された（高等官7等）。独語科に青木昌吉、上田整次がおり、英語に夏目漱石がいた頃である。以後、昭和7年退官した後は講師として1944年（昭和19）まで、終始熊本の地にあつて文字通り五高のドイツ語教育のために尽力した。その期間は実に45年にも達する。これは数年いて他に転ずる教師が多かった中で稀有なことに属する。その理由としては五高の雰囲気や生徒が気に入っていたこともあろうが、2度目に結婚した女性が熊本県山鹿出身の中原淳蔵（工学博士・熊本高等工業学校長）の姪であったこと、及び養子に迎えた小島貞介（のちに独文学者として活躍したが終戦後ロシアの捕虜となり若くして病死）が妻のいとこだったことが大きいと思う。いずれにせよ、この間小島伊佐美はドイツ語科主任を何回も勤め、評議員にもなった。またドイツ語の文法書や教科書を後年相次いで出版した。

1920年（大正9）には文部省より独逸語及び語学教授法の研究のため独米に1カ年半の留学を命ぜられた。この時は親戚で五高教授の坂田道男が同行した。二人は最初ロサンゼルスに同胞の発展する姿を見、次いで米国大陸を横断しシカゴを経て紐育に着いた。そこでの印象は「小島教授欧米視察談」（『龍南』第185号、大正12年）に詳しい。12月24日当地を出発、翌年1月2日にリヴァプールに上陸、ロンドンに入った。そこから大陸に渡りフランスのパリ及びその付近を視察し、戦跡を訪問して予想以上の惨状を目撃した。次いでベルギー、オランダを経て目的のドイツに到着した。以後1年有余、ベルリン大学の聴講生として専門の研究の傍ら、第一次大戦後におけるドイツの社会の状況を具に観察した。上記「小島教授欧米視察談」は帰国後五高生たちを前にして行った視察談であるが、彼らは教授の該博な知識と鋭利な批評眼とに映った敗戦国ドイツの状態を教えられ、深く感じさせられた。小島は「独逸が連合国の峻厳

なる制裁の下に苦しみつゝ、特に仏国の飽くなき圧迫妨害に耐え忍びつゝ、微かながらも歩一歩を辿ってゐる状態」を具に語り、「独逸は必ず一度復興するであらう。復興させずには置かぬのが所謂独逸魂である」と力をこめた。さらにドイツにおける政治・社会・議会の政党的区別、革命後のドイツ国体及び国旗の話、社会主義運動及びこれに対抗すべく起こってきた国粋派の反動的運動について熱っぽく語った。

小島と坂田は留学中は旅行案内記ベデッカーを持ってドイツ国内のみならず北欧諸国も旅行して回った。坂田が『九州新聞』に連載した「北欧の旅」には当時の様子が興味深く語られている。

小島らは大正11年8月23日に帰国した。留学によって見聞を広め、また新知識を吸収したことでその後ドイツ語の授業も一層自信に満ち、興味のあるものになったであろう。小島は帰国後すぐに勲4等瑞宝章を受け、昭和3年には勲3等瑞宝章を授与された。昭和7年依願退職となったが、引き続き講師嘱託として勤めた。同年5月には校長を勤めた武藤虎太と共に五高最初の名誉教授の称号を受けた。昭和10年1月5日の宮中御宴に招かれた時、61歳の小島は「光栄を辱うして」と題して次の2首を詠んで亡き父母の霊に捧げた。「此の姿父母の御霊の見たまは、うれし涙にくれたまうらん」「此の姿見たまふ父母のうつし世にましまさぬこそ悲しかりけれ」(『五高同窓会会報』第8号、昭和10年4月発行)。

昭和19年3月31日付で五高講師を辞め、教師生活にピリオドを打った。そして長年住み慣れた熊本を去り、東京の吉祥寺に住んでいた長女いさ子の家に身を寄せた。この時婿養子の小島貞介は出征中であつた。

小島伊佐美が亡くなったのは日本の敗戦が色濃くなった1945年(昭和20)6月15日である。享年70。戒名は「直心院釋二謝居士」である。「二謝」という言葉は親と世間の人々に感謝するという心をこめて伊佐美自身がつけたもの。墓は郷里の金沢市野田山墓地にある。

小島の教室での教授振りについて向坂逸郎(大正7年文科)は「忘れ得ぬこと」(『龍南』第239号、昭和12年10月)という文章で次のように証言している。

「私の高等学校生活の忘れ得ぬ人々の中には、小島伊佐美先生がある。私は、いまでもドイツ語の話が、友人達の間で出ると、相手が五高出であると否とを問はず、『小島さん』(当時吾々はさう呼んだ)について語るのを常とする。私共は、先生に、三年間、ドイツ語の時間の大部分を教はった。先生の教授振りの特質は、生徒が、自分で考へることによって理解を深めて行くといふ所にあつたらしい。難解の文章があつたりして、当てられた人が適当な答へをしないと、全クラスの一人ひとりに当て、答へを求められた。生徒が自分の頭で考へて答へて来るまで気長に待たれた。」

この方法で一番大切なドイツ語を解く精神を教わつた。ドイツ語を読む面白さを学んだ気がする。「元來語学には得意でない私に、語学の興味をいつまでもそそるといふこの『精神』は、全く小島先生に学んだと思つている」と向坂は語っている。さらに「小島先生は、おこりもせず、おだてもせず、へつらいもせず、静かな科学者として、倦むことを知らぬ熱心さでこの精神をつぎこまれたやうである」とも述べている。

向坂逸郎には『資本論』や『ドイツ』(ラッツェル原著)などの優れた訳書がある。『資本論』は岩波文庫にもなつて有名であるが、戦前に出た『ドイツ』(中央公論社)は今では知る人は少ない。これは実に丁寧な仕事であつてドイツとドイツ語に対する訳者の愛情といったものを

感じさせる。向坂は筋金入りのマルクス経済学者であったが、それだけではなかった。根底にはドイツ語とその文化に対する関心と愛があったのだ。そしてそれは五高時代に小島のドイツ語の授業によって培われたものであった。

木下順二（昭和11年文甲）もやはり、小島はドイツ語の発音に関して、生徒が正しい発音が出来るまで気長に待っていたと語っている（『龍南回顧』）。つまり訳にしる発音にしる、生徒が間違おうと小島は「違うよ」と指摘するだけで、あとは生徒が自分でその誤りに気付くようにするというのが彼の教え方だった。

また田島勝太郎（明治35年法科）の「逢春録」という文章（『五高同窓会々報』第2号、昭和6年）によると、若い頃はクナーベ（少年）と生徒間では呼ばれ親しまれたが、質問したり突っ込んだりすると、その次には必ず当てられ誠に弱った。だが3年の時に習ったイエーリングのキャンプ・ウム・レヒト（権利の闘争）は大変為になったという。

小島には『独語文法教科書』『独逸時事読本』『独逸語教本』『独逸新読本』等の編著がある。いずれも教科書として編んだものである。「邦人用独逸文」と冠した『独語文法教科書』（初版明治38年、大倉書店）は主著で全文独文で書かれている。「凡例」において次のような意味のことを言っている。外国語の文法を学ぶには可能な限り原語で書かれた本を用いるのが効果が大きい。従って学校の教科書もなるべくそうすべきだが、ドイツと日本では事情が異なるので、ドイツの教科書を直ちに日本の学生の用に供するわけにいかない。それで浅学を顧みず本邦学生のために本書を編纂した、と。そして参考書としてハイゼ文法など8種の原書を挙げている。全体を上下2編とし、上編では音論・詞論・文章論等について簡潔に説明し、下編において詳論に入る。それによってドイツ語を学ぶに必要な文法の知識を修了させるとしている。発音については「独逸語ヲ正確ニ発音セント欲セハ殊ニ音ノ長短強弱ニ注意スルヲ要ス」と述べ、本文において適宜その記号を付し生徒が陥りやすい誤りを矯正出来るように配慮している。本書は大正5年に第7版が出ている。

『独逸語教本』（初版明治44年）は初級文法教科書であって「序言」では次のように述べている。

「凡ソ外国語ヲ学ブニハ先ヅ始メニ日常見聞シ又ハ既ニ知悉セル事実ヲ其国語ニテ如何ニ言ヒ表ハスカヲ学ブラ以テ効果多キ方法ナリト是レ近時西洋ニ於テ所謂実物教授ノ行ハル、所以ニシテ本書亦此主義ヲ適宜ニ応用シタリ卷末特ニ日本ニ関スル記事ヲ付シタルハ亦此精神ニ基キタルモノナリ」

卷末の付録とは、マイヤー百科事典の「日本」の項目から採ったものである。大正8年に第6版が出ている。

小島の編纂した上記の2冊の文法教科書は明治から大正にかけて多くの五高生たちに小島文法として親しまれた。その功績は大きい。

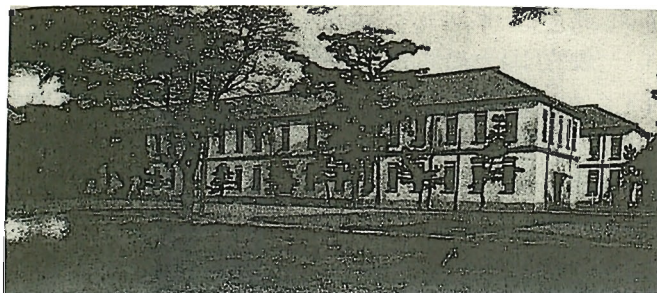
小島の人となりと趣味について孫に当たる小島明氏（東京都武蔵野市在住）は次のように語っている。祖父は厳格で威厳があり無言実行型で感謝の気持ちを忘れなかった。例えば自分の教え子が困っている時は黙ってその学生の授業料を払ったりした。趣味は釣りで、広島県の忠海で船を借り親戚の人たち鯛釣りをし、その場で料理して楽しんだことがあった。日本酒をたしなんだ。ドイツ留学のみやげとして娘のイサ子にアップライトピアノを持って帰り、それがきつ

かけとなりイサ子の長女はピアノの道に進み国立音楽大学を出、今でもピアノを教えている。宗教には深入りしなかった。とにかく祖父は決して威張ることをせず、謙虚であった。

熊幼のドイツ語教育

明治の陸軍は、日清戦争直後に陸軍幼年学校を大幅に拡充して、一期合計三百人の地方幼年学校を全国六都市に開設した。九州では熊本城二の丸に置かれた。主たる目的は堅実な徳操と、軍人精神を純粹培養するにあった。さて、この六地方幼年学校において特記すべきは、その修得外国語である。当時独協中学など特殊な二、三の中学校を除き、全国の中学校及び高等小学校での必修外国語は英語であった。だが、幼年学校では独、仏、露の三カ国語が課せられ、その内一つを履修した。ロシア語があったのは東京の陸幼で、他の五校では独語、仏語が課せられた。仮想敵国と目されたロシアのロシア語を一校に止め、他の五校に独語、仏語を課したのは軍事先進国たる独仏両国に学ぶためであった。

次に、手元の2冊の『熊本陸軍地方幼年学校一覽』（明治35年及び大正2年）によって同校初期のドイツ語教育を概観してみたい。先ず、1897年（明治30）6月開校の同校の目的については「本校ハ陸軍将校ニ出身志願ノ者ヲ選抜シ生徒トナシ軍事上ノ必要ヲ顧慮シテ普通学科ヲ教授シ軍人精神ヲ涵養シ陸軍中央幼年学校生徒トナルヘキ者ヲ養成スル所トス」とある。士官候補生の養成を目的とする中央幼年学校を本科とすれば、地方幼年学校は予科である。生徒の教育は「教授」と「訓育」から成り、前者は文官教官が、後者は陸軍将校がそれぞれ担当した。入学定員50名。修業期間は3年。9月開始の前・後期制を採った。入学時の年齢は13歳以上15歳以下と定められた。



熊本陸軍幼年学校（明治35年）

一年の前期では最初中央幼年学校編纂の五十音帖により発音、綴字を教え、その後ウォーマン（James H. Worman）のFirst German Bookを用いて読方、訳解、文法、会話、書取等を授け、更にドイツ文字とラテン文字の習字を課した。後期にはFirst German Bookを引き続き使い、それが終わるとその第二を使用し、2年次の前期も同様であった。後期からは大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎編の独文読本第二によって読方、訳解等を教え、別にシェーフェル独逸文典によって文法と作文を教えたが、3年次でも同じ教科書を用いた。

明治期には幼年学校に限らず一般に習字に熱心だった。そのため見事な筆跡の独文を書く人

ドイツ語の授業は（フランス語も同様だが）2年次までは毎週6時間、3年次は7時間実施された。3年間では実に合計750時間に達した。次に多いのが代数の276時間であるから、幼年学校では語学がいかに重視されたかが分かる。

次に課程と教科書を見てみよう。